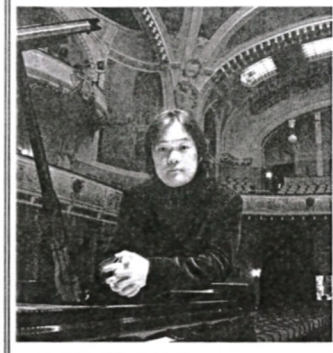


『平井元喜ワールドツアー2018』
待望の日本公演！

平井元喜 ピアノリサイタル

くがんと闘う世界の子供たちに勇気と希望を
吹き手 編集部

作曲家、J・S・バッハ／ハ短調パルティータの深淵なる世界とベートーヴェン最晩年の形而上的境地。次にリスト、ゴドウスキー、私自身の編曲によるシューベルトとショパンの名歌曲や「無言歌」を多く作曲したメンデルスゾーンの作品など、ともすれば打楽器的なピアノをいかに歌わせるか、というロマン派の「歌心」の世界。そして、最後に私自身の作品です。

平井 通底するのは、技巧やピアノという楽器を超え、作曲者が想い描いた音楽やメッセージ、「魂」をいかにダイレクトに聴衆の心へ届けられるか。自我を捨て、いかに自然の一部となり、音楽そのものになれるかです。

平井さんの新曲はどの様な作品ですか？ 新曲で表現したかったのはどの様な事でしょうか。

平井 組曲「伝説の詩」は、2007年にデンマークで始めた国際文化交流・教育プロジェクト「音楽と民話で世界をつなぐ」(音楽と朗読と映像のコラボの一環で、世界各地の民話・神話・童話・小説・詩などのために作曲した音楽をピアノ用に編曲し、今回新たに書き下ろ

した小品と組み合わせた作品です。元の編成は、二つのヴァイオリンや弦楽四重奏などで、民話によってフルートやマリナー、和太鼓やアフリカの民族楽器も使いました。15の物語の印象をスケッチした音楽になる予定で、民族の心や地域固有の風土や文化、さらに喜怒哀楽といった人間らしさ、子供らしさ、「生と死」など人類のもつ普遍的テーマを音楽で表現しています。

現在海外でどの様な活動をされていますか？

平井 毎年20カ国あまりを演奏旅行していますが今シーズンは、9月のオックスフォード、ロンドン(カドガンホール)公演を皮切りに、ヨーロッパ各地、フィンランド、東アフリカ、北米・中南米などを訪れます。その中でも故郷・日本での公演は、毎回楽しみで特別な思いがあります。

10代の頃から平和・環境・教育や震災復興支援など様々なチャリティー活動をしてきましたが、ここ数年、英ウィリアム王子が会長を務める「英王立マーティン・スチンガム基金」と協力して、がん医療や研究発展のための募金活動や「がんと闘う世界の子供たちやそのご家族を『音楽で励ます』といった心のケアに重きを置くチャリティー」を続けています。具

体的には、ロンドンの王立マーティン病院で慰問コンサートを開いたり、患者さんとご家族を自分のコンサートへご招待したりしています。

今後の抱負、また、計画がありましたら予定をお聞かせ下さい。

平井 音楽には、人種・言語・宗教の壁を超えて、心に直接響き、ひとを結びつける不思議な力があります。だからこそ、音楽の力で社会をより良くし、同じ地球に住む人たちがより幸せになれるよう活動することは音楽家、芸術家としての使命だと思っています。

また、世界中を旅した経験を生かし、世界と日本をつなぐ文化・交流の活動もライフワークの一つとして続けていきたいです。

♪曲目「バッハ／パルティータ第2番ハ短調BWV826、ベートーヴェン／6つのバガテル作品126、平井元喜／組曲「伝説の詩」(日本初演)、シューベルト「平井元喜編」(海辺にて)「シューベルト」ゴドウスキー／「朝の挨拶」、ショパン「リスト編」6つのポーランドの歌より「乙女の願い」「春」、メンデルスゾーン／ロンド・カプリチオソ作品14、ほか♪11/13・19時、浜離宮朝日ホール♪ミリオコンサート協会(☎03-3501-5638)

96年以来、ロンドンを拠点に世界60カ国以上で演奏する平井元喜氏。カーネギーホール(NY)、コンセルトヘボウ(阿姆斯特ダム)、コンツェルトハウス(ウィーン)などでしばしばリサイタルを開催し、いずれも高い評価を得ている。今回の東京公演について伺った。

今回のリサイタルの選曲の意図をお聞かせ下さい。

平井 プログラムのテーマは3つあります。まず、私が最も尊敬する二人の作